

News Letter vol.43 2012.7.26

コペンハーゲン大学滞在 そしてパリ、トリノへ

派遣期間：2012.3.31~2012.6.29

派遣先：デンマークコペンハーゲン大学
フランス国立遺伝学研究所 (CNG)

国際学会：The 11th International Symposium on
Cytochrome P450, Italy

植物の二次代謝の新しい解析方法を求めて、2012年3月31日に日本を出国、University of Copenhagen, Faculty of Life Science, Department of Plant Biology and Biotechnology (K U - L I F E と称していました) のAssociate professor, Björn Hamberger氏のラボで約2ヶ月半を過ごしました。様々なアプローチで植物テルペノイドの生合成経路、特にモデル植物にはない経路を明らかにしようとしている研究室です。

デンマークで有名な物は、ロイヤルコペンハーゲンや Carlsberg (カールスベア) やアンデルセン童話などありますが、最大の「売り」は親切な人間につきるようです。こちらから、事前に自分の現在の研究で手詰まり気味な点を伝え、新しい実践的な方法は無いだろうか? と乗り込んでいったら、ラボ一番の手練れの Ph.D 学生 Søren 君を専属につけてくれて、初日からマックススピードで実験指導が始まってしまいました。9時に始まり、5時にはもう体も頭もへとへとです。待ち時間というものを作らず、時間があれば直ぐに次の実験をスタートされてしまいます。一度、「銀行に行きたいからちょっと待って」といったら、「次の実験の待ち時間に十分行けるからとりあえず実験をスタートだ」と言った感じです。常に最短時間、最高効率を求めて Søren 君は実験をサポートしてくれますし、ボスの Björn さんも惜しみなくアドバイスやデパートメント内のアレンジをこなしてくれました。ひとつには私の滞在期間が有限であることを強く意識してくれたのでしょうか。できるだけ希望を叶えてあげようという意図がよく伝わりました。もう一つは休日の意識かもしれません。北欧一般なのだと思いますが、働く時は働く、休む時は休むと、オンオフのはっきりした生活が染みついているようです。どうしたら効率が良いかは個人のレベルから大学組織のレベルまでしっかりと考えられていると感じました。おかげで、私には全く初体験の植物での遺伝子発現方法を2つ習得して来ることができました。日本では是非立ち上げて、利用していきたいと思います。

↓一般開放されているコペンハーゲン大学内植物園

↓ N. Benthamiana のインフィルトレーション特訓中



↑学生主催のセミナー
簡単な朝食付



↑パカンスシーズンの前に
ラボメンバー集合

KUはいくつかのキャンパスを持っていますが、私が滞在した Frederiksberg は治安もよく、広い公園など緑に恵まれ、ラボの外での生活も快適に送ることができました。物価と食べ物は「うーん」でしたが。例年より寒い年だったようですが、コペンハーゲンでは6月半ばまで滞在しても暖かいと思える日は数日しか有りませんでした。それでも真冬の厳しさに比べれば幸せな季節なのでしょう。2ヶ月半の滞在で1年間にある公的祝日の半分以上を体験してしまいました。この土地の人の春・夏への期待がにじみ出ているように思います。

* * * * *

ちょっと寒いコペンハーゲンでコート無しで通学する日がないままパリへ移動となりました。パリでは Centre National de Génotypage で最新の次世代シーケンサーを利用した分子生物学的なアプローチで二次代謝経路の解明に繋がられるか、植物生理学専門の研究者と全くのシーケンサー専門の人と打ち合わせです。結果は、全くドライな物でした。「とにかく綺麗なRNAを取りなさい。後は全部任せなさい。」分業という行為がここまで徹底していることに感心しました。

そして、学会参加のためトリノへ。関連分野の学会ですから当然コペンハーゲンの仲間達も乗り込んで来ています。パリ行きはほんの数日の別行動だったのですが、再会を喜び、そして何より今回の最大の収穫、「今後のコラボレーションをより密度濃くしていこう」という約束をして、帰国の途につきました。

上述の文章では現れてない多くの人々と出会いいろいろな約束をして帰ってきました。この様な体験を実現させてくれた本プログラムおよび関係者に大変感謝しています。